

2013

ミュンヘン大学春期集中講座報告書



大正大学

「ミュンヘン大学語学研修に参加して」

人文学科 岡島可奈

2月1日から2月25日までのミュンヘン大学春季集中講座に参加していました。私の見たミュンヘン、そしてドイツの人々について感じたこと、考えた事を報告します。

ミュンヘンで、Tutorの人のご好意で交流会というか、歓迎会のようなものを開いてくれました。その時に知り合った日本の留学生の方が教えてくれたことです。日本人は、旅行に来て物を知らないと。日本人の買い物客は、あまり印象がよくないそうです。無言で入ってきて、商品を手にとって触るけれど、買わずにまた無言で出て行くことがその原因だそうです。日本では当たり前の光景ですが、海外、特に小さなお店では不審人物に見えるそうです。お店に入るときに「Hallo」など挨拶をして、見ているだけでもその国の言葉で「綺麗」とかコメントをつけて、出るときに「さよなら」みたいなことを言うだけでも随分印象が違うそうです。そのようなことを知らないままに旅行に来る日本人が多い、というような事を教えてくれました。日本では当たり前にしている事が、海外では悪印象になるところは知らなかったので、とても参考になりました。自分の国の常識が、その国で常識であるとは限らないということを、意識しなくてはいけないと思いました。



ドイツの駅には改札はありません。ドイツで一番最初に驚いたことです。旅行ガイドには、ドイツは自己責任を重んじるので、自主性に任せている、という風に書いてありました。切符の範囲も、リングで分けられており、同じリングの中であれば同じ料金で乗ることができます。切符を買わないと無駄乗車もできますが、月に何度か抜き打ちで切符のチェックをするそうです。私は2回遭遇しましたが、大体の人が切符を持っていました。駅の中の自動販売機ではお菓子を売っているものと、飲み物を打っているものがありました。自動販売機は駅以外ではほとんど見ませんでした。街中にはそういうものはなく、日本との違いを実感しました。日本では無駄なくらいあるのですが、ある生活に慣れてしまっているので、ないことに不便を感じてしまいました。日本人は何でも手に入る生活に慣れてしまっているのを実感しました。

ドイツのトイレは、たいていが有料でした。日本の公衆トイレの気分でデパートのトイレに寄り、出たときにチップを要求されて驚きました。海外では、チップを貰わないと生活できないくらい安い賃金で働いている事もあるので、トイレを掃除している人の給料になると教えてもらいました。あとでTutorの人に教えてもらいましたが、払わなくてもいいそうです。そのあたりのことはよくわからないので、人がいるようだったらお金を残すようにしましたが、チップを見ていると、20セントもあれば50セントもあり、合計すればかなりの額になるだろうと思いました。ドイツの物価は、日本の数字と比べると安いので、チップだけでもかなりの生活費の足しになるだろうと思いました。

日本人の会話は「共話」で、ドイツの人の会話は「対話」なのだと教えてもらいました。ドイツの人の会話は、一人が完結した文を言い、それに答える人も完結した完全な文章を返しますが、日本の会話は、一人が言ったことを、答える人も繰り返し、自分の言葉をつけたしていくことで会話を完結させます。ドイツは論理や理論を重く考えるようで、遅刻したときや、なにかしでかしてしまったときに、まず「言い訳」を求められると聞きました。遅刻してきた人に、先生が「どうして遅れたの？」と聞いているのを見て、その通りなんだな、と思いました。日本

では言い訳をするよりも謝る事が好まれますが、ドイツでは違うようでした。知らないでただ謝るだけだと、印象が悪いのはわかります。ドイツは個人主義で日本は集団主義の国といわれましたが、まず謝る、ということは、集団の輪などを乱さないために必要な事なのだろうかと考えました。

文化交流会で、日本人のほうが自分の国について多くの意見を出していました。それは、ドイツに留学に来る人は大体そういう風に客観的に日本について考える人が多いのではないか、といわれたのですが、私の意見は違います。集団主義で集団の中に居るからこそ、自分の立ち位置に気を配ったり、上司との摩擦の少ない接し方、先輩でもいいのですが、違う人と調和しながら生きていく傾向のある日本人は、比較的客観的に自分の立ち位置を把握しようとするのではないでしょうか。集団の中に居るからこそ、集団としての悪いところ、嫌だと思うところ、直してほしいと思うところを意識することが多いのではないかでしょうか。ドイツは個人主義の国、といわれましたが、個人主義ということは、自分のことは自分でするし、自分のことは自分で決めるということです。自分のことだけでなく、集団として行動するということは、集団の印象が自分の印象になることもあります。それが嫌であれば、悪いところに意識がむくし、客観的になれるのではないかでしょうか。

町を見ていて、さまざまな宗教、人種が入り混じっていることに気付きました。日本では日本人が大半で、アジア系の人がいるかいないか、という割合ですが、ドイツでは、アフリカ系のような人や、アジア系の人など、さまざまな人を見ることが出来ました。ドイツは移民が増えていて、その人たちの言語教育をどうするか、という課題があるそうです。日本でも最近増えてきていますが、私の周りには、日本語が全くわからない、という人は居ませんでした。今はまだいいかもしれません、いつかそういう人達が増えたときに、今見てみぬフリをしていると、あとでしっぺ返しが来る、といわれました。その通りだと思います。面倒だからと見ないフリをすることは、将来自分に返ってくるでしょう。いつか日本も多国籍の国となるかもしれません、そのときに少しでも幼少からの国語教育をおろそかにすれば、子供が苦労することになるのだと気づきました。これは、これから社会に出て行くことになる私達の課題なのだろうと考えられました。

キャリアのシステムも、大学の学歴でその後の人生が決まってしまうことはよくないのだと考えられました。親の富で子供の一生が左右されてしまう今の状態はよくないと思いました。今回の講座は、これからのことを考える、いい機会になったと思います。

日本人は非常に西洋カブレである。そのことは、毎回海外、特に欧米に行く事で痛感するが、今回は密なコミュニケーションを現地人と取る事ができたので、より痛感した。私自身はこの現状を問題であるととらえているが、他文化を需要することで自文化を確立するという独自のスタイルを持った日本文化において、むしろ他文化への憧憬を排除することはナンセンスであるのかもしれない。

また、歴史的文化遺産への価値観というものは主観に属する問題であることも考慮すべき点であろう。個人的には、日本国土における継承時間が長ければ長いほど価値のある文化である、という価値観である。また逆に同時代人の価値観を表明したものであればあるほど価値があるとも見なしている。つまり、端的にいうならば、ベートーヴェンよりヒルデガルト・フォン・ビンゲンやヘルムート・ラッヘンマンに価値を置いているし、義太夫よりも雅楽か武満徹に価値を見いだす。しかし、本来の日本文化は伊勢神宮の遷宮からも分かるように、新たな実態を技術の継承に価値を見いだすものであるから、目に見えた継承が生じない。それは、環境要因も大きく関係しているだろう。地震帶国であること、活火山が多く残ることはこれらの文化意識に影響を及ぼしていないとはいえない。

また、哲学の端をギリシャとする文化圏にみられることだが、基本的に彼らの思考はロゴスによるものである。ここからも分かるように、彼らは意識化、言語化することを至高の考察であるとしている。この点に関して、東洋の文化は概ね一致した見解を見せている。インド哲学において、言語への不信感は非常に強いものであったことは、教えを口頭によって受け継ぐことからも分かる。また、ほぼ同時代と言われる、アジアの一方の霸、中国の孔子も言語への不信感が強い。中国哲学とインド哲学は同じアジアと言っても相当の隔たりを表面的には見せるが、ここにおいては非常に根幹的である。情報環境学者の大橋力氏は自著『音と文明 音の環境学ことはじめ』において、従来の言語を司る脳は左であり感覚を司るのが右であるという学説を否定し、言語脳は左脳のみであるのに対し、感覚は全脳にわたっていることから、本来動物は物事を言語化せずに捉えており、言語脳は非常に付加的なものであるとしている。（ちなみに本書は、自身がミュンヘン滞在中および半日、合計1日のフライト中読んでいた本であることからも、言及するに足りる材料であるとした）このことからも、言語化、意識化するデカルト的価値観には限界があることが分かる。

ドイツ哲学の特徴として揶揄される言葉に深淵バカという言葉があるが、むしろ意識化もしくは言語化バカと言いたすことができるはずである。対して日本は非常に感性的な文化といえる。もはや、意識化することを忌避しているのではないか、といえるレベルであろう。しかし、意識や言語というものはそれほどに信頼できるものだろうか。そもそも、理性と感情というものは対立構造ですらない。感情に理性が包括された関係である。現に倫理というものは時代に左右されるものである。このことからも、いかに理性が環境要因に流れやすいものであるかが見て取れる。

日本学先攻の、交換留学で去年、ミュンヘン大学から大正大学へ来た学生も交えたディスカッションにおいて文化の違いについて討論した。上記はその討論とホストファミリーとの会話において見いだされたものであるが、討論を行う上で問題となるのが語彙の少なさである。おそらく私のドイツ語の語彙は1000に達していないだろう。この段階で政治的な問題を討論することは非常に難しい。もちろん、現地に長く住む通訳業を生業とする方の同席や、日本人の教授の同席などがあるが、自分で翻訳しないということはそこに解釈が加わるということである。

例えば、多くの翻訳もので”I” ドイツ語でいうところの”Ich” はその人物の性別や性格などに合わせて日本語の俺や僕や私に振り分けられるわけだが、”I” や”Ich” は一人称を著す単語でしかなく、我々が自分を著す人称を使うのとは概念が異なる。多くのヨーロッパ言語の一人称はむしろ、行動の所属が誰なのかを明示しているものである。それに比べて、我々が一人称を使うもしくは使い分けるときそれはTPOに応じるという建前のもと行われる、自身の所属の暗示である。相手に対してかしこまった人称を使うということは、私は貴方よりも下の位です、と表明していることと同じである。このことからも、人称の使い分けがそもそもない言語から日本語へ翻訳するということはそこに他者の解釈が加わってしまうし、解釈を加えなければ翻訳することはできない。

このことからも、我々は自分の解釈によって翻訳することが最もダイレクトに物事を伝えられるに違ないのである。

しかし、週に一度8ヶ月勉強した程度でその程度のドイツ語が身に付くはずもない。もちろん、自分の勉強していることをどのように表現するか、その場合どのような単語が必要になるか、の準備は行っていたが、これは非常に不十分なものである。例えば、私は女性で半分僧侶である。この場合司祭を著す”Priester” 修道士を著す”Mönchin” は”-in” を付けて女性名詞化することができる。しかし、そもそも僧は僧である。これを仮に前置詞として”buddhistisch” を付けたとしても適切ではないことは一目瞭然である。また、我々がキリスト教であれば対して変わらないと思っているのと同じく、彼らにとって天台宗も浄土宗も大差はないのである。彼らが興味を持つのは教義の差よりも、例えばお寺のシステムであったり、日本の宗教法人法における寺社の位置づけであったり、寺の所有者は誰かということであったりする。これらは、日本語で話しても全て理解させることは難しく、また私自身も全てを理解しているわけではなく、さらに法律というものは解釈が加わるものなので、他の日本人僧侶と私の見解が違うということは多いにありうる。このような問題を説明するには1000にも満たない語彙は非常に脆弱である。もちろん、これは私のホストファミリーがビルマに長期滞在していたことや娘がこの夏タイに行くということも加味されなければならないので、全てのドイツ人が日本仏教に興味を持つわけではない。ただ、一ついえることは、私のホストファミリー宅と別のホストファミリー宅そして大きな本屋の特設コーナーに南方仏教スタイルの仏像があつたことだけは確かである。しかし、同時に修道士の街としての背景を持つミュンヘンはドイツでは信仰のまだ厚い地域であろう。無宗教の街と言われるベルリンに比べて治安の良いのも、それに関連しているという見解もある。

今回同行したメンバーの中で唯一私がドイツ二度目であるが、前回はベルリンに行った。このとき、衝撃的出会いがあったことが今回春期講座へ応募する切っ掛けとなったのであるが、ベルリンを見てドイツであると思っていた私にとって、これほど地域差があることは驚きである。もちろん、日本も東京を見て日本であるとは言えない。東京は公設、私設問わずインフラが整っているが、地方は目に見えるところから見えないところまで行き届かないところは多い。また大都市であっても大阪と東京だけとっても非常にキャラクターが異なる。これ以上に、ミュンヘンとベルリンは異なる印象を持つ。ベルリンは二年前に行ったのでもちろん壁が崩壊して随分たつにも関わらず、中央駅前は再開発中であるし、少し治安の悪い地域へ行く地下鉄では明らかな薬物中毒者が今にもうちたそうにしていたが、芸術はむしろ斬新でモダンなものが多かった。それに比べ、ミュンヘンは非常に保守的である。上流階級の街、という言葉が非常に似合う街である。街そのものがハイクラスであると言える。もちろん、日本に比べれば圧倒的に移民の数も多いが、彼らもそこそこの生活レベルを保っているように見受けられる。しかも、少し悪かった子供たちの髪型が50年代のアメリカを思わせるのがもはや微笑ましい。海外初渡航が多いこのプログラムにおいてミュンヘンという選択は非常に有益であろう。

「ミュンヘン大学語学研修に参加して」

人文学科 坂爪悠馬

私は、今まで海外に出たことがなく、自分が生まれ育った日本から外の世界を見てみたいと思い、今回のミュンヘン大学春季集中講座を申し込んだ。そして、実際にドイツでの生活を通じて海外と日本との違いや、自分が日本人としてどのようにありたいか、考えさせられた。

初めて国外に出て一番大きく感じたことは、やはり外国人と日本人の考え方、言葉や表現の違いであった。生まれた国によって話す言語や育った土壤が違うのであるから、当たり前であるが、日本からはるかに遠く離れたドイツでは、それが大きく感じられた。第一にドイツ人は、思ったことを率直に言葉にする。非常にイエスかノーかを明確に表現するように思われた。私は、大学で哲学を勉強しているが、ドイツ語はその文法構成から論理的であり、優秀な哲学者達が多くドイツ語圏から輩出されているのにも納得できる。また、ドイツの小学校を訪問しても、日本との違いに気がつかされた。ドイツの小学校は、一般的な日本的小学校よりも少人数のクラスで授業が進められるように思えた。授業中においても先生が出す問題に、皆元気良く手を挙げて解答しようとしていた。この点、日本的小学校では、先生に回答を促されて初めて解答するように、日本的小学生よりもドイツの小学生の方が、自主性が強いように思えた。これらの点は、ドイツ人の見習えるところだと思われる。日本人は消極的で集団主義の強い傾向にあると言われるが、もう少し自主的に自分の考えや思ったことなどを的確に表現できるようならなければならない。

次に、ミュンヘン市内外のさまざまな場所を見学して思ったことである。まず、最初にミュンヘン中心部のマリエンplatzという場所は、駅から出ると広場になっていて、そこにはとても大きく美しい石造りの建物がある。これは旧市役所で400年ほど前に建てられたものである。その旧市役所の周りにも多く教会などの建築物があり、いかにもヨーロッパの雰囲気が出ていた。ドイツは地震が殆ど起こらないため、このような古い石造りの建築物がそのままの形で残るそうである。地震大国の日本は木造建築が発達したがそれはそれで環境に適応したものなのであると感じた。

プラグラムで訪れたオーストリアのザルツブルグは、大きな川を境に旧市街と新市街に分かれており、新市街の方は現代的な建物が並んでいるが、旧市街の方は古い町並みが已然残っている。旧市街の方にあるマクドナルドの



建物も、周りの建築物に溶け込むような設計がされていて、歴史的な建築物などを、建物自体では無く街全体で残していくとする考えが感じられた。しかし、ミュンヘンやザルツブルグなどの観光地はそのような良い面だけでは無かった。まず、路上喫煙と煙草の吸殻のポイ捨てが多いことに驚いた。ヨーロッパは全体的に禁煙運動が盛んなイメージを持っていたが、ドイツにおいてはその限りではないようだ。確かに、飲食店や喫茶店の店内においては、完全禁煙ではあるが、一歩外に出ると路上で喫煙している人が多かった。電車内もあまりきれいとは言えなかつたので、この点では、日本のほうが公共機関を使う時の意識が高いように思われた。そして、観光地での物乞いの人の多さにも驚いた。ザルツブルグやミュンヘンでは、何人も紙コップを持って通行人の善意にすがっている人達が見受けられた。

ミュンヘンは特に治安が良いとは聞いており、実際に市内でもよく警察官の姿を見たり、パトカーが走っていたのだが、日本ではこのような光景はほとんど見られないものである。ミュンヘンは比較的富裕層の多く住む土地だと聞いたが、このように世界には大きな格差が存在することを知った。

ドイツの歴史についてという点で考えさせられた場所は、マリエンプラッツなどのミュンヘン市内の教会などといった建築物もそうであるが、なんといってもダッハウの強制収容所であった。正面の門に設置された「Arbeit macht Frei（働けば自由になれる）」という文字や、バラック小屋の無数の狭いベッド、資料館に展示されている写真の数々や、使われることの無かったガス室など、ダッハウは敷地全体に重い空気が漂っていた。

また、ドイツの学生は、このナチスの時代のドイツの歴史を、とても長い期間勉強すると聞いた。歴史は解釈の学問であるから、ある特定の時代について、現代の視点からその時代の行為を断定することはできないが、その時代の記録を風化させることなく、残していくということはとても重要である。その点、このダッハウ強制収容所跡は、歴史資料館として良く出来たものである。歴史とは、現代に直結することなのである。日本人も、もっと自国の歴史をしっかりと学んで、そこから現代に生きる自分自身のあり方について考えていかなければならないと思われる。



「ミュンヘン大学語学研修に参加して」

歴史学科 小林 大貴

今回私は、大正大学で毎年実施されているミュンヘン大学春期集中講座に参加し、ドイツ語会話を学ぶ語学研修やミュンヘン市内の観光といった文化研修の大きく二本立ての現地授業を受けた。この講座に参加した理由は、3つある。1つには、大学入学前よりヨーロッパ地域の文化や街、美術、歴史に強く関心があり、本学のこの講座に参加することで、実際にヨーロッパの一地域へ行けることができると思ったからである。また、入学直後から2年の秋学期まで、大学の教養科目の中にある第二外国語の選択としてドイツ語を履修しており、授業で学習した会話表現や文法を、実際に現地で自分なりに活用してみたいと思ったからである。そして、本学で専攻している文化財学や美術史学に関する興味や視野を、ミュンヘンに行くことで少しでも広げたいと思ったからである。

今回のミュンヘン大学春期集中講座に参加して気づいたことは、次の大きく3つの切り口で考えた。

まず初めに、ドイツにおける人についてである。今回の集中講座では、学生の生活スタイルがミュンヘン市内の家族にホームステイをするという形であったので、生まれて初めての経験で少し緊張し、不安も強かった。しかし、毎日の美味しい食事や使用する部屋の提供をしていただき、まだドイツ語の習得が未完全である私に対して、日常の出来事や、してほしいことについて積極的にお話を頂いた。日本の家族と違ってドイツの家族は、新しく出会った人や誰に対しても、日本のように極端な他人行儀にならず、対等かつ親切に接するのだと感じた。また、日常的に通ったミュンヘンの街の人々は、自分自身の欲求や言いたいことを、口だけでなく態度ではっきりと述べていると考えた。具体例を挙げると、ミュンヘンの公共交通機関であるSバーンやTramを管轄・経営しているMVG（交通局）の案内所に行った際、乗客の受付に行くために列に並んでいた。自分より2人前の乗客が受付職員から呼ばれていたのにも関わらず、もたもた歩いていたため、その職員が早く来てほしいとの気持ちか、拳で机をノックしていた。日本ではお客様に対して何度も声をかけて気づかせるのが一般的であると考える。

次に、ドイツにおける人々の価値観や考え方、教育についてである。今回の集中講座では、ノイシュバンシュタイン城の見学といった観光だけでなく、ミュンヘン近郊にある "Grandshule"（日本でいう小学校に当たる）の授業のお手伝いや見学にも参加したが、ドイツの教育では、教師が教科書を読み上げ、黒板に長い時間板書をし、それを児童にひたすら写し取らせる日本の教育とは違い、児童全員と簡単な歌を歌い、教師がすべての児童ひとりひとりを指し、意見や感想を述べさせる方法を徹底していて、児童が授業に対して積極的かつ自発的に発言や意見を述べられるようにさせている環境であると考えた。またドイツ語の授業では、教科書だけでなく、教師が作成した架空の絵葉書を使い、昨日の出来事を文章で書かせるといった、実践的かつ独創的な教材も用いられていたので、学んだ内容をアウトプットさせる習慣が身につき、定着しやすい方法だととも考えた。さらに、学校や会社が平日5日間の通勤・通学、週休2日制のシステムが日本よりも圧倒的に徹底しており、休日には必ず隣国や近郊へ旅行をしたり、外食に行ったりする。また、講座期間内に参加した "Fasching"（カーニバル）の来場者は、大人も子供も顔にペインティングを施し、完璧に仮装をして参加し、全力で楽しんでいるように感じた。ドイツ人は休日を大切にすることから、「働く」と「休む」のバランスが、日本よりも大変調和していると強く感じた。

次に、ミュンヘンにおけるものについてである。今回の集中講座の期間中、市内の音楽ホールでオペラやジャズ演奏を鑑賞し、Alte Pinakothekといった大型の美術館でキリスト教絵画やドイツ以外の国の絵画や彫刻作品を多く鑑賞した。各音楽ホールや各美術館は、年齢は関係なく、さまざまな人々が鑑賞に来て、芸術を楽しんでいた。日本では美術館や音楽ホールで芸術鑑賞するのは、非日常的な体験であり、芸術にあまり関心がない人はほとんどと言っていいくらい進んで来館しない。

しかしミュンヘンは芸術に触れることができ日常の行為になっていて、非常に身近であることを改めて感じた。そして、ミュンヘン市内のペーター教会や郊外のノイシュバンシュタイン城は周知の通り、日本の寺院や城郭と比べると大規模なもので、もちろん世界各国から多くの人々が観光名所として訪れているが、それらの施設は今でもミサや講話が行われており、それらに参加するために訪れる人もいた。この光景を見て、近代化及びグローバルな社会になった現在でも、キリスト教の精神や伝統が生き継がれていると肌で感じた。日本のように特定の宗教に信仰している人が少ない現状と比べると不思議なことに思える。ミュンヘン郊外の街ダッハウに以前あった、ナチスドイツとしてはじめて建設されたダッハウ強制収容所跡の見学も行ったが、ナチスドイツの無差別大量殺人について、日本の教育ではユダヤ系の人々が虐殺されたと伝えているが、実際にはギリシャ人やロシア人、アフリカ人といった違う人種や地域の人々も虐殺していた事実を展示品を通して伝えていたことから、歴史事実に対して真正面に向き合い、戦争による損害を与えてしまったドイツの反省、全世界への発信が濃厚に現れていた。

今回のミュンヘン大学春期集中講座に参加したこと、ドイツ人の文化、価値観、衣食住、歴史、芸術、ミュンヘンに関して様々な体験を通して学ぶことができた。しかし、ヨーロッパの中心的な宗教であり、中世期には大きなイデオロギー、芸術では重要な主題であったキリスト教、様々な芸術、歴史についていかに自分が無知であったかということを考えさせられた。また、勉強や娯楽でも言えることだが、この人生の中でできる限り自分とは違う様々な考え方や物事、知らなかったことを多く学び、知りたいと改めて強く考えた。そして、今後の学生生活で機会があれば、ミュンヘンはもちろん、国内のベルリンやハンブルグといった大都市、スペインやイタリア、イギリスといったヨーロッパの様々な地域に旅行し、多様な文化や歴史を学びたいと強く考える。

「ミュンヘン大学語学研修に参加して」

人文学科 森田 益見

この春期集中講座に参加しミュンヘンの街に滞在することで、日本について考える機会が多くあった。外国に行けばほとんどのものが「初めて」の対象となり、比較対象は勿論日本となるからだ。これが日本とは違う、これは日本ではない、そういう比較から始まり、何故日本はないのか、何故違うのかという疑問に至る。日本にいてはできない経験であり、それにより日本人なのに日本について全く知らないということに気づかされた。

現地の人々と接して思ったことは、言語に対する姿勢が大きく異なるということである。チューターや街で出会った人々、自分のホストファミリーのうちほとんどの人は英語を習得していた。学生であるチューターの中には英語、日本語だけでなく韓国語やイタリア語、スペイン語など多くの言語を学んでいる人もいた。また自分たちの語学力が無いというのも大きな理由ではあるが、現地のチューターはドイツ語ではなく日本語で様々なものを説明してくれた。チューターの人たちの語学に対する姿勢は日本人とは正反対である。日本人で英語を習得している人は少ないだろうし、他言語に関してもそうである。他国と隣国関係にないからこそ「自分たちの国」という感覚が強いのであろう。他国の言語にそれほどまで力を入れているように思えない。



これと関連するが、日本を離れてみて自分が日本人だということを強く意識するようになった。それと同時に、自分が日本という国について無知であるということも痛感した。この講座の最終週に現地のチューターを交えて、異文化交流という授業を行った。そこでは自分たちの国について思いつくことを挙げていき、ドイツと比較することを最初にした。自分たちが挙げた項目は後々分類すると「集団主義」という大きな枠組みの中に納まるものが多く、反対に現地のチューターがドイツという国について思いつくものを挙げた項目には「個人主義」という枠組みの中に納まるものであった。これは本当に当てはまるものだと強く感じた。現地で実際に行動してみたからこそ言えることだが、日本人は常に集団を考えて動こうとする傾向がある。周りの目を気にしたり、賛同を得ないとなかなか行動に移せなかったりする。日本人はこれをネガティブに捉えるが、チューターはある程度の集団主義であればポジティブに捉えるべきだと言った。ここでも考え方には違いがあると感じた。

またドイツ人曰く、ドイツ人は感情をストレートに表すという。だからこそ、日本人の「本音と建前」という文化が理解に苦しむらしい。日本人にとっては負の感情を表に出すことはあまり良いことではないというイメージが強い。それ故にその場の雰囲気に合わせることを優先し、思ってもないことを言ってでも場の雰囲気を悪くしないようにしようとする。この交流によって何を優先するか、どこに価値観を置くかが全く違うということがよく分かった。また自分たちがネガティブに捉えていることでも、他の文化圏の人々からすればまた違ったイメージとなることが、異文化交流の面白い点だと思った。「視点を変える」ということの重要性を学んだ。

ミュンヘンに滞在したのは僅か25日間であるが、ホームステイすることによって一日中ドイツの文化に触れることができたことはとても良い経験だった。ドイツ語をほとんど話せなくともホストファミ



リーとコミュニケーションを取ることはできるし、言葉をあまり介さなかつたが故にこう言いたかった、これを受けたかったという惜しい面もあるが、だからこそそれがこれから語学を勉強していく上で大きな原動力になると思った。

自分を異文化の中に置くという経験はそうできるものではない。この経験を通して出会えた人たちのこと、学んだこと、考えたことを大切にしていきたい。



2月にミュンヘン大学春期集中講座に参加させていただきました。ドイツ語に関しては文法も不安なところばかり、会話に関してはあいさつをなんとか言える程度の学習しかしていなかったので、現地でのコミュニケーションに関してはとても不安でした。しかし、日本語が少ししゃべることのできる人もいたり、ドイツ語しかできなくても伝えようとゆっくり話してくれたりと、現地の皆さんはとても親切でその不安はすぐに消えました。私たちが留学生だとわかっているのだから当たり前だと思われるかもしれません、優しかったのはかかわりのある人たちだけではありませんでした。

私が初めて1人で乗ることのときのことです。路線図を片手に持つてはいたのですが、日本ほど多くはないものの、多くの表示があり乗り換えに戸惑っていました。誰かに聞こうにもドイツ語があまりわからないためにどうやって聞くか悩んでいました。その時、後ろから英語で大丈夫ですか?と話しかけてくれました。そのおかげで無事に私は目的地に着くことができました。そのあとも、日本人みんなで道に迷ったときにドイツ人に道を尋ねると、その人もわからないのに地図を確認してくれて教えてくれたり、その人が色々な人に聞いてくれて人が集まっていたりと、日本ではなかなか見ることのできない親切さがありました。日本では困っていてもなかなか助けてくれる人がいなかったり、または困っているのは明らかなのに見ているだけの人が多いので文化の違いを感じました。

もちろん、日本人の文化が悪いと言っているわけではありません。日本人にももちろん助けたいという気持ちを持つ人もいます。しかし、日本人は消極的なために、行動に出ることができない場合がほとんどだと思います。余計なお世話だったらどうしようとしたり、自分から助けましょうか、といったのに助けることができなかつたらいやだなと考えたり、相手のことを考えすぎて消極的になってしまふんだと思います。けれど、消極的なのは相手の気持ちを配慮し、遠慮していることでもあるので、消極的なのが必ずしも悪いとは思いません。これは、日本のいいところでもあり、悪いところでもあると思います。

それに比べドイツでは、小さいころから消極的なことは好ましくなく、積極的なことが評価されるようで、積極的になるように教育されるようです。授業でも、積極的に手を挙げて発言すればするほど、評価がよくなるといわれました。これは、スケジュールに組まれていた文化交流会で話を聞きました。自分の気持ちはきちんと相手に自分で伝えられることが1番大事だそうです。ここは、日本ととても違う文化だな、と私は感じました。けれど、どちらもいい文化だな、と思うことができました。

1番驚いたことは、ドイツ人の大半は英語が話せるということです。それも、片言とかではなく、急に話しかけられても対応できるほどに大半の人が話せます。私のホストファミリーによると、ドイツ語と英語は少ししか違わないし、発音もとても似ているから覚えやすい、だから大半の人は勉強して覚えるのだ、と言っていました。それに加え、ドイツには多国籍の人が多いというのも理由のようでした。日本は、9割から8割ぐらい、もしくはもっとおおい割合でが日本人で、残りが外国人のような気がします。実際に、私は小中高と日本の学校に通っていましたし、大学も日本ですが、日本人ではない人がクラスメイトにいたということがありませんでした。今も同じ学部にいません。むしろ、昔クラスメイトに外国人がいた、という人の話もあまり聞いたことがありません。聞いたことがあるとしたら、ハーフぐらいでした。ハーフなら私の小学校にもいたけれどそれも珍しいので、すぐにその人は有名になったりした記憶があります。しかし、ドイツでは小学校でもドイツ人が半分で、あとはほかの人種の人だったり、その人種に偏りもなくさまざまな人種の人であふれています。私のホストファザーの職場も、ドイツ人は3割で、あとは様々な人種の人がいる、と説明されました。こういうのもドイツの人が英語を話せる理由の一つなんだなと思いました。

今回、このミュンヘン大学春期集中講座に参加し、私は日本では退官することのできない文化の違いにたくさん触れることができました。あまり語学も海外も好きなほうではなかったのですが、実際にドイツに行ったことでドイツのいいところをしっかりと自分で見ることができ、異文化に直接触れ、海外への意識、語学に対する意識が大きく変わりました。語学ができないからと行かないより、それこそ積極的に参加してみることの大変さを実感させられた体験でした。

「ミュンヘン大学語学研修に参加して」

人文学科 村上泰葉

今回のプログラムが私にとって初めての海外だったのだが、一番の問題となったのが言語の壁だった。普段当たり前のように使っている言葉がとても大切なものであると感じた。ホストファミリーや先生が使うドイツ語を聞き取ることに躊躇、自分が話す場合には語彙の少なさと文章構成に躊躇いた。文字で表されていれば考える時間もできるが、会話となるとそうはいかない。そうであっても、やはり何度も聞くうちに次第に慣れていくもので、よく使われる単語は聞き取れるようになる。例えばホームステイ先でよく耳にしたのはschönという単語である。「美しい」という意味で覚えてはいたが、使われた場面はさまざまである。また、授業で回答が正しかったときに先生が使う単語は何種類もあり、日本語との違いを感じた。



日本との違いといえば、驚いたのはキッチンである（右写真）。私のホームステイ先ではキッチンとともにテーブルがあり、食事はそのテーブルでとった。そういった家庭はほかにもあるらしい。キッチンで食事をとるので、もちろんそこにテレビはない。日本ではほとんどの家庭が食事をとりながら見られる位置にテレビが置いてあるのではないだろうか。テレビがないことで家族の会話を楽しめるのかもしれない。

ドイツの休日は始まりが遅い。9時や10時にゆっくりと朝食をとる。日本の私の家庭では遅くとも8時には朝食をとっていた。休日は十分に休息をとるようである。日本のように休日でも仕事をするようなことはないだろうと思った。日曜日はほぼすべての店が定休日である。休日こそ稼ぎ時ではないのかと思ってしまう。しかしパン屋は開店しており、ドイツにおいてのパンの重要さを知った。種類も豊富にあり、いたるところに店があった。

後半に行われた異文化交流では、日本人側とチューター側に分かれてそれぞれ自国の特徴をあげ、それを元に意見を交わしあった。海外に出て改めて感じた日本や日本人について多くの特徴が挙げられた。普段は気に留めないことであっても、ドイツの人々と比べると特徴的に見えてくる。チューターの一人に指摘されたのだが、日本人の特徴として「建前」が挙げられるようだ。彼にとって一番理解に苦労したのはその建前だという。いわれてみれば確かによく使っていると思った。ドイツの人々は物事をはっきりというが、日本人は建前の裏に本音があるようだ。自国について、自分たちについて考えることができ、それを他国の人々との交流によって深めることができたこのプログラムは興味深いものだった。大きくまとめてしまえば文化の違いとなるが、その中にはたくさん小さな差異が含まれており、おそらく挙げきることはできないだろう。

日本との違いは毎日のように発見していたように思う。言語をはじめ建物や生活、人柄など三週間の間で多くの差異を経験し、学ぶことができた。このプログラムを通して自分の考え方の見直したい部分もできた。視野が広がるとしても良い経験だった。これからはこの経験をもとに、視野を広げて様々な方向からの考えを生み出していこうと思う。

